

（故）石岡繁雄先生の教え

政府は 2006/09/12 の閣議で 8/15 急逝された登山家で応用物理学者（元）鈴鹿高専教授石岡繁雄氏に従四位と瑞宝小綬章を贈ることを決めたと報道された（中日新聞 2006/09/13 夕刊）。石岡先生の登山界、教育界、ナイロンザイル事件の解明、多くの発明と研究を通しての社会・国への多大の貢献を考えれば没後の叙勲は遅きに失した感がある。天声人語（朝日新聞 2006/08/17）や中日春秋（中日新聞 2006/08/18）も石岡氏の大きな社会貢献と教訓を引用している。北アルプス穂高屏風岩正面壁初登攀の成功、名大学生部勤務時代、ずさんであった奨学生選考基準を「石岡の方程式」によって新基準を考案し、当時の日本育英会奨学生選考の基礎を確立、1955 年前穂高岳のナイロンザイル切断事故での実弟の墜死から、ナイロンザイル事件解明へ半生を捧げ、事故から 20 年後に国が世界で初めてザイルの安全基準を制定・・・などなどである。作家井上靖さんの有名な小説「氷壁」はこのザイル切断事故がモデルで、井上靖さんは石岡氏の訴えが綴られた冊子を読んで「社会的にも重要な事件だ」と執筆意欲に駆られたといわれている。

石岡先生は”登山の最前線と大衆化をリードしたあの本、この本”として評価された「屏風岩登攀記」初版 1949.9.25 刊；同再版 1974.10.15 刊；同第三版 1977.12.15 刊（以上硯学書房）；同中公文庫版 1980.8.10 刊の著者として、”登山者がぜひ読んでおきたい山の名著”として推薦された「穂高の岩場 1・2」岩稜会 の会長としても知られるが、また CBC ラジオ 2001/1/31~2/2 放送の中部英傑伝でもその登山家としての素晴らしい活躍が紹介された。

先生は一昨年、女性初の屏風岩征服者（中日新聞 1948/7/20）としても知られる最愛の伴侶であった敏子夫人に先立たれ、その悲しみと闘いながら「ザイルに導かれて―登山家石岡繁雄の半生」を出版された。この著書には先生自ら編纂された多くの貴重な記録が記されている。特に「ナイロンザイル事件から半生記―21 世紀の登山者、社会が引き継ぐべき教訓を考える」の項では**ナイロンザイル事件は結局、不当さを放置する限り社会の前進はありえないことを教えている**。不当さを克服するうえで多くの人々の共同、理系文系を超えた共同作業などが必要ではなかろうか。この教訓は上記天声人語や中日春秋も引用し、大きなものや権威に屈せず自らの手で「壁」を乗り越えた石岡繁雄氏への賛辞を報道している。

筆者は有機化学を専攻し、登山とはまったく無縁であったが、名大化学科学生時代から名古屋市昭和区の石岡先生宅離れに 7 年下宿生としてお世話になり、役には立たなかったが同僚たちとともに初期のナイロンザイル荷重実験補助、須賀太郎先生（当事名大工教授、金城学院大学山岳部顧問併任）らと北アルプス登山に連れて行っていただいたこと、また酒豪であった石岡先生の愛称から名付けられた下宿生 OB の親睦同窓会―バッカス会などを通して先生に感化を受けた一人として、改めて先生の暖かい大きな人間性、人間賛歌の人生哲学をここに記して感謝の気持ちをお伝えしたい。

石岡先生が名大学生部から豊田高専助教授に転出されて間もない頃は大学紛争が大問題であった。当時の須賀太郎校長（応用物理学者・名大名誉教授で石岡先生の恩師）から「登山の立場からみた最近の大学問題」というテーマで所見を書いてほしいと依頼されて先生が執筆された「**和を以って尊しとなす**」と題した小文の別刷りを当時いただいた。このなかで先生は、（イ）秩序は守られなくてはならないこと、（ロ）民主化平等化の精神への移行の必然性、ハ）単純な多数決ではない愛の精神が行われる（連帯感が生まれる）社会機構の必要性 を強調されている。これは屏風岩という日本最大の絶壁を三人で登攀に成功された体験に基づいた所信であるとして以下の自序部分を紹介されている。

「なぜ登攀不可能といわれた直立 700 メートルの大絶壁が上れたのであろうか。それは純粋な友愛にもとづく協力、現代の社会にあつては、ほとんど登山界だけにしか成り立ち得ない共同社会、自分の生命が直ちに他人の生命であり、目標に向かつての他人の一步の前進が直ちに自分の一步の前進であり、一個の自分がそのまま数個の自分へ拡大し発展した社会。そこにおいて始めて発揮出来る技術と斗争心こそが成功へのカギであったと確信した。かえりみて成功の原因がそこにあったことに思い至ったとき、始めて私はこの手記を公にすべく筆をとる気になった。すなわちこれは単に私たちの誇らかな登攀記ではない。か細いながら**これは人間への賛歌の一節**である。屏風岩の正面岩壁に対して私たちが小さく一時的かつ実験的ながら持ちえた社会、そのような社会がもし現実の生活のすべてを包含する規模で持ちうるまでに人間が進歩した暁を想う。」「すばらしいもの」それはつねに「人間」であらねばならぬし、

あるに違いないという確信を屏風岩は私たちに刻みつけた。「その岩壁に私たちが刻みつけた一挙手、一投足の足どりの代償として」というものである。

石岡先生の人生哲学の根源はこのように、**人間への賛歌**、ヒューマニテイであり、現実が自分からみて、どんなに愚かであり卑俗であっても断じて挫けない人間。どんな事態に直面しても「それにもかかわらず」と言い切る自身のある人間。「そういう人間だけが政治への天職を持つ」というのはドイツの社会学者マックス・ウェーバーの言葉として有名であるが登山家・応用物理学者としての石岡先生にも通ずるものがあると改めて実感している。

鈴鹿高専教授を定年退官されてからは石岡高所安全研究所長として、登山用ザイル・ロープなどの安全研究を続けられ、国内以外にもフランス、英国、中国など世界的に講演・学会活動を続けられた。石岡先生は応用物理学者・発明家としてナイロンザイル事故解明から、衝撃時における登山綱切断防止装置（昭 33. 11. 17）、ロープ制動装置（昭 63. 8. 25）、下降路移動型非難用降下具（平 3. 6. 28）[これらを基に開発された登下降器ハイセーバーは日本消防検定協会から“特定避難機器”として認定されている]や介護者入浴用浴槽型身体保持具（平 16. 10. 15）など多くの発明や石岡式支援装置システム：ハイナースの開発にも成功され、弁理士協会会長奨励賞表彰を受けていることを付記しておきたい。

（バックス会）江口昇次

右の写真

一昭和 32 年 7 月 15 日、鈴鹿山脈 御在所岳兎の耳にて、オネストジョンの実験を手伝う、石岡宅下宿当時の江口さんです。（写真上の白い帽子の方）中央白いシャツが父。岩稜会の方々と一



下の写真

一昭和 35 年 5 月 17 日～18 日、鈴鹿山脈 愛知川にて石岡一家と下宿族 9 人でハイキング。後列左から二人目が江口さんです。一

